



オーガニックビレッジ座談会 開催レポート 01

2025.2.24(月) 17:00~19:00



(話題提供)

株式会社坂ノ途中 代表

小野 邦彦さん



近江八幡市

オーガニックビレッジ

近江八幡市では、有機農業の推進を通して、健やかで魅力的なライフスタイルが実現できるまちをめざすこととしています。

今年度予定する「近江八幡市有機農業実施計画」の策定にあたり、生産はもちろん、流通・加工、消費といった観点から、近江八幡市のめざす方向性や具体的な取組内容について、広く意見をいただくため、オーガニックビレッジ座談会を開催しました。

当日は23名の方に参加いただき、農業や食について、活発な意見が交わされました。

有機農業の現在地

座談会の第一部では、株式会社坂ノ途中の代表、小野邦彦さんに有機農業に携わる生産者の実情について話題提供をいただきました。

新規就農者の9割は有機農業を志向するも、小規模な生産からはじまる新規就農者の農産物は既存の流通システムでは経営が成り立たず、離農するケースが相次いでいます。坂ノ途中では、小口取引にも対応可能な受発注システムの自動化、野菜のブレを許容する消費者意識の醸成などをつ

うじて、新規就農者でも取引しやすい流通の仕組みを構築されています。

また、同社が発刊する「有機農業白書」からは、生産者の売上規模に応じて販路構成や経営上の課題に顕著な違いがみられることや、有機農業の拡大にあたっては、これまで有機農業を購入する習慣のなかった消費者の取り込みが重要であることなど、調査結果に基づく示唆が提供されました。



第2部

グループディスカッション

参加者のみなさんから、たくさんの意見が出されました

全般



- ・有機農業の推進を通じて、社会全体をどのように変えていくのかについてビジョンが必要
- ・有機農業の定義にはライフスタイルも含まれることを踏まえて、近江八幡市における有機農業の定義、自然環境や生態系・市民のライフスタイルを有機農業を通じてどのように良くしていくのかの議論が必要
- ・有機農業の推進を通じて人間と自然の健康をめざしつつ、市内で実践されている様々な農法の掘り起こし・活用を行い、市民のライフスタイルを変えていく
- ・従来の環境こだわり栽培と有機農業の関連性を整理したうえで、有機農業に切り替えることによる収量・品質への影響、経済性のバランスを踏まえて、どこまで有機農業を推進するのか設定することが望ましい

就農支援

- ・新規就農する際、行政に相談に行っても農地を借りられなかった。有機農業推進の前に、就農そのものへの支援を拡充すべき
- ・農地を借りたい人と貸したい人を明らかにし、マッチングする仕組みづくり。農地を手放したいときの相談フローも現在は明らかではない
- ・生産者が安心感をもって有機農業に取り組める環境づくり。農業はいまやお金持ちしか参入できない状況のなかで、どのようにして担い手を増やしていくかが重要
- ・農業は孤独な生業。新規就農者は特に。農業者を孤立させないように、経営ステージ毎に適切なサポート・フォローの仕組みが必要



流通・PR



- 市内で有機農産物を効率的に調達できる仕組みがない
- 有機農産物を購入したくても、どこに行けばよいのか分からない
- 学校給食などで有機農産物をもっと食べる機会があればよい
- 有機農産物のブランディングに限らず、近江野菜のイメージチェンジが必要
- 新規就農者には、豊浦ねぎなど地域の伝統野菜の振興も担ってほしい

消費者意識

- 有機農業の定義を正しく把握したうえで、慣行農業ともうまく共存していく前提ですすめてほしい。有機と慣行のどちらがよいということではなく、消費者が自らの意思で自身が食する農産物を選択するというのが自然な流れ
- 近江八幡市として既に進めている消費者教育とも連携を図ってほしい。大根にスが入っていても許容する消費者の意識醸成



LINEオープンチャット



LINEオープンチャットからもご意見をいただきました

LINEのオープンチャット機能を用いて、座談会当日ご参加いただけない方からも広くご意見やアイデアをお寄せいただきました。いただいたご意見やアイデアは、座談会で参加者の皆さんに共有し、意見交換に活かしていただきました。

家庭菜園の促進

個人で実践する

「Seed To Table(種から食卓へ)」

- ・米や野菜など食品の価格高騰対策として、プランター栽培やミニ畑の普及を促進してはどうか
- ・家庭菜園や自家農園は、オーガニックを支える市民の意識、能動的に関わるきっかけになる
(例) 市内種苗店や野菜ソムリエによる「自産自消」の勉強会

学校給食への有機食材の採用

- ・近江八幡市の学校給食では、毎月「8」のつく日に「はちまんの日」として、市内産の野菜、伝統野菜を使っているが、オーガニックビレッジの推進に伴い、毎日オーガニック給食にできれば、子ども達の健康増進にも寄与できるのでは
(例) 農業大学校指導のもと、学校の畑を有機にして学習する機会をつくる

消費者意識の醸成・周知

- ・オーガニックフェス開催や、道の駅などに専用コーナーを設置
- ・市民向け講演会、勉強会（循環型農業、ぼかし堆肥づくりなど）の実施
- ・映画「未来の食卓」などオーガニックに関する映画上映会の実施
- ・キッチンカーでの販売
- ・料理教室を開催し、有機農産物の認知度向上と消費拡大のきっかけづくりに
- ・オーガニック加工品のふるさと納税返礼品への採用
→寄付金の使途として「オーガニックビレッジ発展」を追加

ガストロノミーツーリズムの推進

- ・農と食を体験するツーリズムの推進

地域ブランドの強化

- ・認知度の高い「江州水郷ブランド」のプレミアム版をつくる

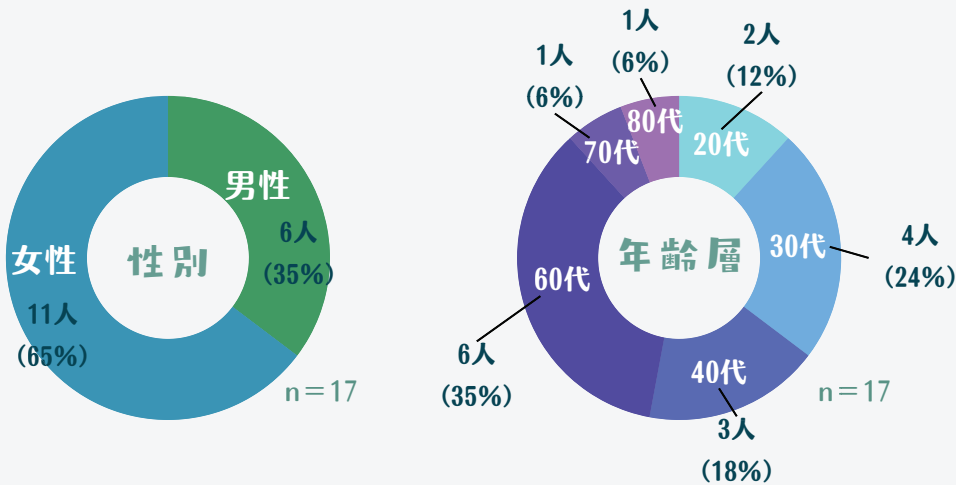
地域資源を生かしたオリジナル堆肥

- ・地域の強みである「近江牛」の牛糞から堆肥をつくり循環させる
- ・近江牛堆肥のブランド化

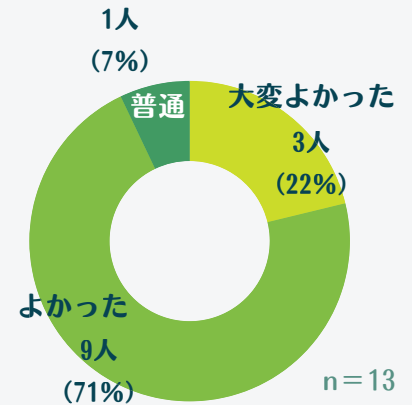


アンケート結果

参加者属性(回答数17)



座談会満足度(回答数13)



印象に残った内容、話題提供の感想

- ・ 様々な視点からの意見があり、オーガニックとはともう一度考え直すことができた
- ・ この場が開催されたことが嬉しい
- ・ 有機農産物への関心度は高いが、有機栽培は苦労も多い
- ・ 想像以上に多様な参加者が集まり、広い視点から健康な農業のあり方を考える機会となった
- ・ 生産者と流通事業者との溝を埋める、新規就農者のケアが必要
- ・ グループディスカッションでは、様々なバックグラウンドの方がいて面白かった。農業以外の視点から意見が出ることがすごいと感じた
- ・ 話題提供の内容がよかった。参加者の皆さんの想いを聞けて、自分には何ができるのか、近江八幡市民として考えるきっかけになった
- ・ 話題提供で、8割の新規就農者が継続できていることを聞けて嬉しかった
- ・ 近江八幡独自の有機農業へのチャレンジが必要
- ・ 有機野菜の意識を変える考え方が必要
- ・ 有機栽培にはポイントがあり、ポイントを守れば取り組んでいける。こういった経験を学べる場があればよい
- ・ 気づきの多い会だった
- ・ 野菜は生きている。有機肥料が高い
- ・ トータルインプットをいかに最小にするか
- ・ 近江八幡独自のオーガニックのあり方を考えたいという思いを持っている人が多かった
- ・ 話題提供が非常に興味深かった。データから見てくる世界が面白い
- ・ 近江八幡市内の農法の発掘の話も興味深かった。伝統的な農法を調査することで上の世代の人たちにも関わってもらうなど、そこにヒントがあるかも

アンケート結果

オーガニックビレッジの推進に向けて必要な方向性や取組内容 (自由記述)

- 
 - ・ 市民への周知が大切。難しいことではなく、ほんの少しのきっかけで自分も周りも、近江八幡市も変わることができる。人間も作物も元気に心豊かに過ごせる環境づくりが必要
- 
 - ・ 小さくてもいいから実行していくことが大切
- 
 - ・ 対象エリアを定めるのか、広く市内展開するのか。誰がどこで何をするのか明確にする。
 - ・ 生産物販路などのマーケティング
 - ・ 既存の水郷ブランドやSDGsとの関わりの明確化
 - ・ 消費者へのPR
 - ・ 地産地消なのか、自産自消なのか方向性が見定めが必要
- 
 - ・ 本来は、もっと早く座談会を開催し、実践者の経験や知見などを活かしてこそ、オーガニック農業への取組の第一歩となる。メインプレイヤーが加わらないままの予算編成ではいけない。
 - ・ オーガニック農業への取組は単なるイベントではなく、国防・国の安全保障上も重要。国民の健康と食の安全は切り離せない。オーガニックビレッジ宣言を機に本質的なことを改めて問い直すことが大切
 - ・ 当初数年間は周辺のことではなく、本題であるオーガニック農業そのものに予算もエネルギーも割いてほしい
 - ・ 座談会には子育て中の若い親をはじめ、食の問題に関心を寄せる多くの方に参加してもらいたい。生産者と消費者の分断を、両者のつながりを生む機会をとおして解消し、地産地消の定着や健康の増進につながることを願う
- 
 - ・ オーガニックに取り組む各立場のギャップを埋める必要がある
 - ・ 新規就農者とベテラン農家、資源の廃棄に悩む人と使いたい人、農地を借りたい人と貸したい人、聞きたいことがすぐに聞けるオンラインツールがあるとよい
 - ・ 生産者の顔が見える産直市場が人気。オンライン上でも生産者のオリジナリティを含む情報が揭示されるとよい
- 
 - ・ いかに自然を生かして、より豊かな暮らしができるのか、形だけの有機農業ではなく市民の幸せにつながる方向性が大切
 - ・ コミュニティーガーデンに取り組んでみたい。食育の推進をとおして、都市部の人たちが気軽に遊びにきてくれるまちになるとよい



アンケート結果

オーガニックビレッジの推進に向けて必要な方向性や取組内容 (自由記述)

- 
 - 生産者（特に有機生産者）は孤独に陥りがち。有機農業に取り組もうとする生産者が安心感を感じられる環境づくりが必要
- 
 - オーガニックを進めることによる反発がないか不安もある。
 - 新規就農者が長く続けられる取組内容が必要
- 
 - 有機資材の地産地消（ヨシの有機利用、放置竹林の有効利用、食品残渣の有効利用など）
- 
 - 近江八幡らしいオーガニックの仕組み
 - オーガニック給食の実現。子どもの頃から考えることが大切
 - 地産地消を進め、顔の見える安心な農産物を選び、食べることができる環境
- 
 - 関係者が連携・協力できるシステムの構築
 - 土地改良の必要性
 - 生ごみ堆肥の製造・提供
- 
 - 江州野菜のイメージチェック
- 
 - 生産地と消費者が近い利点を活かし、協力し合ってめざすべき方向性を決めるのがよい
- 
 - 近江八幡市としての「オーガニック」の言語化
 - 既にある資源の発掘（竹林、ヨシ地、耕作放棄地、有機農家、直売書、段ボールコンポストのノウハウなど）。また、既に行われている取組をまとめ紹介、関われる仕組みをつくる
 - 市独自の登録制度、パートナーシップ制度など

<方向性①新規就農を増やす>

- 公開講座や、今回の座談会のような講演の開催
- 貸し農園や体験型ワークショップの開催
- 既に実践されているイベントへの助成



アンケート結果

オーガニックビレッジの推進に向けて必要な方向性や取組内容 (自由記述)



＜方向性②慣行栽培から有機栽培への転換サポート＞

- ・市内農業生産者の高齢化・後継者不足に対応するため、跡を継ぎたくなる魅力のある「有機栽培」の推進
- ・情報や資材にアクセスのしやすい市内農産物直売所に協力をあおぎ、有機資材の取扱いをしてもらう。もしくは、直売所や有機資材取扱希望店向け勉強会の開催

＜方向性③有機農産物が買える場所を増やす＞

- ・有機栽培や有機農産物に関心があっても、購入できる場所がまだまだ少なく、興味を持ってもらっても次につなげるのが難しい状況。例えば公共施設の売店などで農産物が買えるとよい。もしくは、買える場所のマップなどがあると便利かも。

＜方向性④消費者教育に力を入れる＞

- ・せっかく近江八幡市は消費者教育に関して、全国的にも進んだ取組をしているので、消費生活センターとコラボで企画（勉強会・講演会・ワークショップなど）を開催する

近江八幡市 総合政策部企画課

[所在地]

〒523-8501 滋賀県近江八幡市桜宮町236番地

[TEL]

0748-36-5527

[E-mail]

010202@city.omihachiman.lg.jp

